

## 社会・経済を比較する（その二）

盛田  
常夫

# 過密社会と過疎社会 —社会の価値体系

ハンガリーにいれば、日本との習慣や価値観の違いが気になる。他方、久しぶりに日本に行くと、今度はハンガリー、いや歐州との習慣や価値観の違いが気になる。

上に事細かに定められている。ファイットネスクラブのプールで競泳時間を測ろうと思い、アウェトドア用の腕時計を付けたままプールに入ろうとしたら、規則で駄目だという。他のお客を傷つける可能性があるというのがその理由。一方通行のコースが張られているから、そんな心配は要らないでしようと言つても、規則ですから」という。まさか千メートルも泳ぐとは知らなかつた係員が、「私がストップウォッチで測りますから」というので、時計を外し、百メートルごとのラップタイムを計つてもらつた。さすがにくたびれたのか、「次回から、長距離の場合は事前にご連絡ください」と宣つた。別の機会にハンガリーのお客さんを連れて行つたら、今度はブレスレットを外してくださいという。当人はもう二〇年ほど外したことがないという。実際、外そうにも外れない。この時はさすがに、「それでは例外ということで」と、渋々、「許可」してもらつた。

富を所有することで、便益を享受する。したがつて、消費財や耐久消費財への購入が富の保有形態となる。しかし、小さな家やマンションに押し込められる動産（耐久消費財）には限界がある。

日本のように所得水準が高いと、ありきたりの消費財やサービスの購入だけではカネを使い切れない。そこに、あらゆる種類の財やサービスが発展してくる基盤がある。日本ほど一つ一つの消費財やサービスに凝っている社会はない。神経過敏症と思われるほどに、一つ一つの商品やサービスに磨きがかけられて販売される。そして、人々はそのような手の込んだ商品やサービスを購入することで、豊かさを感じ、満足感を得る。つまり、日本人はストックで得られない幸福感を、フローの消費で味わっているのである。そして、もつとも即時の消費満足度が高いのが、飲食なのである。

過密社会では、時間だけを与えて貰っても、それを有効に使う機会が限られている。だから、自然と、時間より力ネを選好する。稼いだ力ネを消費フローに使つて満足感を得る。休暇を取らずに、超過勤務手当てを稼ぎ、それを消費財・サービスに消費して、富を実感するという理屈になる。

このように見ると、過密社会ではフロー財に価値があり、時間より力ネに価値があることが分かる。力ネがあつても、なんとなく生活の余裕や豊かさを感じられないのは、こういうことから説明されるだろう。これにたいして、EU諸国の所得（フロー）水準は日本のそれよりはるかに低いが、歐州の生活には余裕が感じられるのは、ストックをベースにして、生活になつてゐるからだ。

過密が生み出す規則社会

とにかく日本人は規則が好きだ。外国に進出して  
いる日本企業の工場でも、壁に張られた規則や標語  
がやたら目に付く。しかし、これは多いほど良いと  
いうものではない。大概が工場長の自己満足。多く  
なればなるほど、規則や標語の効果は薄れていく。  
人は一度にたくさん規則を守ることはできないし、  
情報が多くなりすぎると、感性が麻痺し、注意が散漫  
になるので、何もないと同じことになってしまふ。  
しかし、日本企業や日本社会ではどうして規則が  
こんなに多いのだろうか。その原因是「過密」にあ  
る。日本では狭い国土に多数の人がひしめき合って  
いる。多くの人が狭い所に生活していると、カオス  
に陥らないように、集団を規制する規則が必要にな  
る。そこからまた、過密社会に特有の生活ルールや  
価値観が出来上がっていく。

## 過密社会の価値観

日本の食文化の発展は目を見張るものがある。都市の中心街へ行けば、もの凄い数の飲食店が乱立している。食べ物屋が繁華街のメインイベント。日本の都市ではあらゆる種類の食を味わうことができるのである。日本人は何故これほど食べることに貧欲になつてゐるのだろうか。昔は貧しいから貧欲だったのが、今は裕福の中の貧欲、つまり飽食になつてゐる。貧欲的な飽食現象とでも言おうか。これも過密社会の価値観に關係している。

国土が狭く、人口が多いと、不動産（ストック）の相対的価値が高くなる。こういう社会では不動産で富を保持するのに絶対的な限界がある。いくら力を使へども、不動産購入で享受でくる便益はきわめて限られている。だから、人は動産（フロー）で

過疎社会の西直觀

ヨーロッパのように、ひとつひとつの共同体の規模が小さく、人口密度が低いと、過密社会とは対照的な価値観が出来上がる。

べることに、大きな価値を置いていない。仕事の後のパブでは、ビールを飲みながら談笑するが、日本のようにいろいろな子皿を何種類も注文して、食を楽しむことはしない。もちろん、フランスやイタリアの食文化は豊かだが、平日の夜は食べることが第一義的な意味を持つことはない。気のあつた仲間や友人と語り合ったり、議論したりすることに、意味を見出している。

アジアとヨーロッパ

用も生み出さ  
ない。だから、  
カネはストック財購  
入に使い、その所有スト  
ックを最大限に活用するため  
に、時間が必要なのだ。ここに、  
過密社会とは対照的な過疎社会の生活様  
式と経済価値観が生まれる。





本来は謝りの言葉だが、一般には人と人の間の「摩擦回避語」になつてゐる。何かをしてもらつた時に、「有難う」と言うと格式ばつてしまふので、「済みません」と謙(へりくだ)ることで、人と人との良好な関係を維持しようと気遣つているのだ。混雜した電車から降りる時も、やつぱり「済みません」だ。これほど便利な言葉はない。これを使つていれば、人との関係が悪くなることはない。これはもう、身に染みついた条件反射のようなもので、何でも「済みません」で済ます習性が付いてゐる。どうしてこんな配慮が必要なのか。それもこれも、過密社会の中で生きていく知恵なのだ。過密社会では人と人との距離が近く、他人を意識して生きていかざるを得ない。そこにコミュニケーションの知恵と独特的の価値観が生まれる。